

# 琉球大学学術リポジトリ

ベニョフスキ伯爵の『回想録と旅行記』の国際的比較：東欧人・日本人・琉球人たちの叙述をとおして

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2019-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: グレジユク, シモン, Gredzuk, Szymon メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/44331">http://hdl.handle.net/20.500.12000/44331</a>

様式第7号

学位論文題目

学 位 論 文 要 旨

ベニョフスキ伯爵の『回想録と旅行記』の国際的比較  
東欧人・日本人・琉球人たちの叙述をとおして

琉球大学大学院

人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学生番号 XXXXXXXXXX

氏 名 GREDZUK SZYMON

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

本論文ではマウリティウス・ベニョフスキ伯爵（1746-1786）と彼の著作とされる『回想録と旅行記』について日本や海外のこれまでの先行研究を批判的に検討し、日本と海外の資料を相互補完的に参照することにより、最新のベニョフスキ研究を提示する。

この謎めいた人物はロシア帝国の捕虜になった後、カムチャツカへ流刑されたが、収容所をおよそ70人とともに小さい帆船で脱走した。1771年にマカオへの通航を切り開く途中で、千島、伊豆諸島、四国、奄美大島、台湾、などの地域を通航した。没後に出版された彼の『回想録と旅行記』は著者の驚異的な冒険を叙述するとともに、当時の自然環境や人々の生活の様子について述べる記録としてヨーロッパで大人気を博し、また日本・琉球に関する初期の情報源にもなった。次第に「嘘つき男爵」として彼の残した記録について信憑性が疑われるようになる一方で、東欧でベニョフスキが多国の英雄として伝説化されてきた。鎖国時期の日本には到来した脱走者との接触は偶然かつ限定的だったが、ベニョフスキが残した書簡はその後の日露関係、日本の蝦夷地域への関心、あるいは日本の海防思想に否定できない影響を与えた。

本研究では日本や海外のベニョフスキ研究について、相互比較的に検討する。すなわち、日本のベニョフスキ研究で紹介されていない海外の情報を検討するとともに、ヨーロッパのベニョフスキ研究で検討されていない日本側の研究成果を相互参照し、現代におけるベニョフスキをグローバルな観点で総括する。

本論文の構成は、まず第1章にベニョフスキの略歴で始まり、研究設定および方法論を説明する。つまり多言語を駆使しつつ、歴史学、人類学、文学、地理学的アプローチを横断的に試みながら、一つの枠組みに閉じ込められない学際的研究の例としてベニョフスキの新たなポスト構造主義の視点から見た評伝の構築に挑戦する。第2章で欧米と日本におけるベニョフスキ研究を2つに分けて再検討する。時間が経つにつれて、別々の地域でベニョフスキに関する言説はいかに発達してきたか指摘する。第3章および第4章はこの東欧人たちの航海についての具体的な考察である。ベニョフスキに関する資料は複数のヨーロッパ言語で残されているため、その多言語による資料を日本側の日本語資料と総合的に検討した上で、『回想録と旅行記』の記述を確認しながら、第3章で日本、第4章で琉球の上陸と異文化接触状況を可能な限り再現する。第5章では『回想録と旅行記』の作品および文学や大衆文化の改作により伝説化されるベニョフスキについて考察する。第3章・第4章で再現した歴史事件や第1章で紹介したその主人公は『回想録と旅行記』の原本、初版、様々な翻訳と派生小説、詩、漫画、テレビドラマなどをとおして日本やヨーロッパでどのように評価され、表現されたかを示す。

同5章で結論として、21世紀的観点からその日欧接触事件と伝説に生き続けているベニョフスキの意義について考える。『回想録と旅行記』に描かれた18世紀の日本・琉球沿の東欧人の航海は実況の詳細にも関わらず、多面的かつ国際的な伝説として関係地に影響を与えたり、感想と活動を喚起したりしている。私たちの次第にグローバル化・デジタル化していく日常生活において、文化的な事象として現存するベニョフスキに目を向き、その伝説を考慮する価値がある。